

吉川家伝来「山道草花鶴亀文繡箔胴服」について

神 谷 榮 子

一

今春（昭和四十七年三月）重要文化財に指定された山口県岩国市在住の吉川重喜氏所蔵「山道草花鶴亀文繡箔胴服」は、昭和二十七年四月六日から五月五日まで一ヶ月間開催された東京国立博物館の「日本染織美術特別展」に出陳された以外は殆ど公開されなかった。陳列や撮影の機会が少いことは、染織品保存上の観点からはまことに望ましく、この胴服のように褪色の著しい紅が多量使用されている染織品にとつては願ってもないことである。陳列・撮影といった近年の問題に限らず吉川家では、秀吉から拝領したといわれる時点から今日に至るまで保存上の好条件を具備され大切に伝えて来られた。それ故この胴服は図版1の原色写真からでも窺い得るように、紅、薄紅、黄紅、萌黄、鶉色、浅葱、薄浅葱、紫、金茶、白等の繡糸も色鮮やかに、摺箔部分の金箔も剝落が極めて少く、この種の繡箔としては稀に見る保存状態の良好な遺品資料として今日に残されているのである。

かつて筆者は美術研究二四二、二四三、二四四号の三号に亘って上杉

吉川家伝来「山道草花鶴亀文繡箔胴服」について

家伝来の謙信所用と伝えられる八領の胴服に関して考察を行ったが、その折の調査・考察事項に照合してこの吉川家伝来繡箔胴服の考察を試み、紹介論文にしたいと思う。

二

吉川家の家伝によると、この胴服は天正十五（一五八七）年に朝鮮征伐の功績によって、吉川家の祖先になる吉川広家（永祿4、寛永2）が太閤より拝領したものとされている。

この吉川家伝来の繡箔胴服は、十色余りの色糸による刺繡と金の摺箔^{註3}で胴服の表に出る部分を全面埋め尽くした豪華な衣裳で、山道、即ち稲妻形文様の繡箔地に、雪持芦、松、雪持笹、桐、鶴、鶴の雛、亀が上文として刺繡で散し文様風に配してある。表面のすべてが繡と箔で覆われている地裂は白の練緯^{註4}で、刺繡のために白い紙の裏打^{註6}が表裂全面に^{註5}あり、縫い合わせ目など摩擦で損傷した部分から処々にその裏打紙が見られる。損傷は摩擦による損傷が多少ある位で、その他は保存状態は良好、仕立ても当初のまま後から手は加えられていない「生」な状態であ

b/a	c 襟 キ 肩 × 2	d 衿 下 り	e 立 衿	f 衿 幅	g 合 衿 幅	h 前 身 幅	h/b	i 衿	j 袖 口	k 襟 (襟 折 返 し 側)	l 袖 丈	m 身 丈	重 量	参 照
1.46	16.0	—	18.0	—	—	28.2	0.80	59.0	25.5	8.2 (立てたまま)	51.0	125.0	730 g	美術研究 216号
1.52	16.0	11.5	18.5	15.0	15.0	28.0	0.87	53.0		7.7 (外側 内側も可)	49.0	111.5	520 g	美術研究 242号
1.89	12.0	右10.5 左12.5	18.0	22.5	21.5	36.2	0.97	56.5		11.2 (内側)	48.0	122.0	880 g	美術研究 243号
2.02	15.0	—	11.0	—	—	39.5	1.02	57.5		11.0 (内側)	45.5	101.3	755 g	同 上
2.07	13.0	10.5	25.0	19.0	18.0	39.3	約 1	58.5		8.7 (外側 内側も可)	51.5	123.5	440 g	同 上
1.75	14.0	9.5	14.5	14.5	14.0	38.0	1.05	56.5		11.5 (内側)	50.0	123.0	790 g	美術研究 244号
1.72	18.0	右10.0 左11.0	15.0	14.0	12.5	29.5	0.77	60.0		9.5 (外側)	48.5	101.5	610 g	同 上
1.97	13.5	13.5	32.5	18.0	16.5	37.5	約 1	56.2	22.5	11.5 (内側)	48.7	121.2	不 明 ※	美術研究 228号
1.60	16.0	—	14.0	—	—	肩23.5 裾28.5	0.89	52.0		8.0 (立てたまま)	48.0	109.3	420 g	美術研究 本 号
1.57	不明	約10.0	22.5	23.0	22.0	肩29.5 裾38.0	1	53.0		15.0 (内側)	50.0	117.0	不 明	美術研究 243号34頁 註37
1.77	16.0	—	—	—	—	肩31.0 裾45.0	1	61.0	25.0	13.5 (外側)	52.0	前99.0 後94.0	615 g	美術研究 244号41頁 註51

る。

裏は通し裏で、その裏裂、胸紐の裂、胸紐附部分の三角裂は何れも同種と思われる紅の練緯で、どの部分も紅の褪色が少く鮮やかである。綿入れではなく衿仕立てで、総重量は四二〇グラム、上杉家伝来の謙信所用といわれている胸服八領中衿仕立の「(5)浅葱綾竹雀紋繻、襟摺箔胸服」(一覽表の(5)、挿図8、美術研究二四三号参照)が四四〇グラムであるからほぼ同じ重量といえる。襟は内側には裏側の紅練緯が用いてあり、襟幅が八センチという寸法とを考え合わせると上杉家伝来の伝謙信所用「(1)金銀欄緞子等縫合胸服」(一覽表の(1)、美術研究二二六号図版1、同一二頁挿図1、美術研究二四二号三頁下段一四行照合)同様、首に当たる部分を立てたまま着装したと推測される。

この胸服は、褪色の著しい紅染部分が多量であるにもかかわらず、刺繻部分の紅色の糸も、裏裂等の紅練緯も鮮やかによく色をとどめており、紅染の保存のよい点では、これまでのところ、上杉家伝来の伝謙信所用「(2)紅地雪持柳繻、襟辻ケ花染胸服」(美術研究二四二号図版1、同四頁一、二頁参照)に次ぐ遺品だと思われる。

繻箔で表現された山道の地文の上に刺繻で配された上文は、何れが主体であるかさだかでないが、一見したとき、最も目立つのは芦であるように思われる。この芦は正面、背面にそれぞれ十五、六本前後(襟、袖、身頃の脇などには葉の部分が多いので本数は明らかにならない)、合計三十一、二本配されているようで、少量ではあるが一本に一、二箇所、中には雪を戴かない芦もあるといったように恰も残雪を葉の上に留めたような雪持芦になっている。雪の量はともかく、この手の雪持

		衿	襟	背割レ 裾脇アケ	中入綿	紐	紐用の乳, 三角裂	袖の形	a 袖幅	b 後身幅
伝 上 杉 謙 信 所 用 胴 服 八 領	(1)金銀欄緞子等縫合胴服 (裏・黄色平絹)	ナシ	ナシ	裾脇アケ 22.5	表裂に 紙の裏打	欠	乳 (紺色革)	小袖	24.0	35.0
	(2)紅地雪持柳繡, 襟辻ヶ 花染胴服 (裏・鶯色平絹)	有	ナシ	背割レ 43.0	綿入	紅平絹 ぐけ紐 3×43	三角裂 (紐と共裂)	広袖	21.0	32.0
	(3)白地桐文綾, 襟繡胴服 (裏・紅平絹)	有	ナシ	背割レ 38.3	綿入	赤四つ打 丸紐 37.5+(総)4.5	乳 (裏と共裂)	広袖	19.5	37.0
	(4)白地五重襷牡丹唐草文 綾, 襟繡胴服 (裏・紫平絹)	ナシ	ナシ	背割レ 36.5	綿入 (厚)	紅平絹 ぐけ紐 3.8×37.5	ナシ	広袖	19.0	38.5
	(5)浅葱綾竹雀紋繡, 襟摺 箱描繪胴服 (裏・紅平絹)	有	ナシ	背割レ 46.3	袷	紅平絹 ぐけ紐 2.3×54.5	三角裂 (紐と共裂)	広袖	19.0	39.5
	(6)白地裏菊文綾, 襟唐織 胴服 (裏・紅平絹)	有	ナシ	背割レ 36.5	綿入	赤ゆるぎ打 丸紐 35+(総)3.5	乳 (裏と共裂)	広袖	20.5	36.0
	(7)白地紗綾形雲文綸子, 襟唐織胴服 (裏・紅平絹)	有	ナシ	背割レ 35.5	綿入	紅平絹 ぐけ紐 3×35.7	ナシ	広袖	22.0	38.0
	(8)薄茶濃茶片身替り竹に 雀紋綾小袖型胴服 (裏・萌黄平絹)	有	ナシ	裾脇アケ 26.5	綿入	赤四つ打 丸紐 22.5+(総)4.5	乳 (裏と共裂)	小袖	19.0	37.2
吉川家伝来山道草花鶴亀文繡箱 胴服 (裏・紅平絹)	ナシ	ナシ	背割レ 41.5	袷	紅平絹 ぐけ紐 1.9×53	三角裂 (紐と類似裂)	広袖	20.0	32.0	
石川家伝来紙衣胴服 (裏・紅平絹)	有	ナシ	ナシ	綿入	紅平絹摺 箱紐 幅は3.5	三角裂 (裏と共裂)	広袖	21.0	肩32.0 裾38.0	
伝直江兼統所用薄浅葱緞子胴服 (裏・金茶色平絹)	ナシ	有	ナシ	袷	紫組紐 長さ16.0	ナシ	小袖	22.0	肩39.0 裾45.0	

吉川家伝来「山道草花鶴亀文繡箱胴服」について

※ この胴服は重量を測定する以前の昭和38年度修理で、裏打と樹脂加工が行われたため本来のものの重量は不明である。

b a

挿図1

- a. 芦に鴛鴦, 山に菊の段文様縫箱部分 桃山時代 東京国立博物館蔵
b. 芦に水禽模様縫箱部分 桃山時代 岡山美術館蔵

芦の模様は、室町・桃山期の染織品の作例には多く見られる(挿図1 a b、挿図2)。ただこの胴服に見られる芦は曲線的で、芦とも薄ともとれる図様であり、これは桃山期に入って模様が次第に曲線的な流麗さを増して行く傾向にある時期のものであることを感じさせる。比較のために高台寺や豊国神社の桃山期の蒔絵に見られる薄模様の二、三を示した(挿図3 4)。次に雪持笹(挿図5)、この笹は有

挿図3 桐薄蒔絵唐櫃 側面 桃山時代
京都 豊国神社蔵



挿図4 桐薄蒔絵屏 桃山時代
京都 高台寺 霊屋内部

桐は五七の桐紋で、この種の桐紋は室町・桃山期の工芸品に屢々見られる(挿図2、3、4、7、9)。この桐紋は紋所の位置である背と、肩に近い両

挿図2 伝謙信所用(3)白地桐紋綾・襟繡桐服
襟部分 室町時代 米沢 上杉神社蔵

職文様の桐竹鳳凰(挿図6)に見られる竹を想わせる形で、特に幹にその様子が濃く窺われる。芦同様に少量の雪を戴いた雪持笹となっており、笹二本が一組となったものにそれぞれ雪が一塊宛置かれている。この形の雪持笹が室町・桃山時代には屢々あったのであろう、東京国立博物館蔵の桐竹鳳凰等模様繡箔肩裾(挿図7a)の竹はこの種の雪持笹である(挿図7b)。二本一組となったこの雪持笹は正面に五箇所、背面に四個所配されている。

正面に五本、背面に三本見られる松は、正面襟左下方(向って右下方)の三階の松には頂に一塊の雪が戴せてあり、芦や笹に做ってこの一本だけは雪持松にしてある。この計八本の松は、三階の松は正面に一本だけ、五階の松は正面に三本、背面に一本の計四本、六階の松は背面に一本だけ、七階の松は正面・背面に各一本宛で、この桐服より時代が上る上杉家伝来の伝謙信所用「(3)白地桐紋綾、襟繡桐服」の襟(挿図2)に見られる松は同種の三階の松である。

挿図7 a. 桐竹鳳凰等模様縫箔肩裾
b. 同上 背面裾部分
桃山時代 東京国立博物館蔵

b

挿図5 吉川家伝来縮箔胴服 背面裾部分
桃山時代 岩国 吉川重喜氏蔵

胸、両前袖、両脇、その他は適宜胴服全体に散らしてある。数は正面、背面に各八個、両脇に各一個の計一八個であるが、桐紋の配し方は上杉家伝来の伝上杉謙信所用「(2)紅地雪持柳繡、襟辻ケ花染胴服」の桐紋(美術研究二四二号図版I、II、同七頁)や同じく上杉家伝来の伝謙信所用「(5)浅葱綾竹雀紋繡、襟摺箔胴服」の九枚笹の丸に雀の紋(挿図8、美術研究二四三号図版I、同三一頁挿図18)、京都の豊国神社蔵「伝太閤所用紗綾胴服」(挿図9)の桐に菊紋の配し方と同類である。この胴服の桐紋の大きさは幅も高さも共に

挿図6 麴塵 御袍之類
桐竹鳳麟 近年御再興
装束織文図会より
故実叢書

八・二センチから八・三センチである。鶴も桃山期の工芸品に屢々見受けられる形で、挿図10の岐阜県・関市春日神社の縮箔肩裾小袖には類似の鶴が見られる。正面には飛翔しているのが四羽、背面には飛翔しているのと立っているのが各一羽で計二羽。大

挿図8 伝謙信所用(5)浅葱綾竹雀紋繡・襟摺箔桐服
室町時代 米沢 上杉神社蔵

きさは長さが一

〇センチから一

三センチであ

る。

鶴の雛は正面

背面とも身丈の

約三分の二の位

置から下方(こ

の桐服では、ほぼ

袖下線の位置か

ら下方)に配し

てあり、大きさ

は桐の大きさが長さ約二センチ、頭の尖端まで入れると約三センチであ

る。正面には二四羽(左右の身頃に二三羽宛)、背面には一二羽(右の身頃

に八羽、左の身頃に四羽)配してある。これら計三六羽の鶴の雛は見返っ

たり、首を後向きにして胴体の羽に埋めるような恰好をしているのも混

ぜながら(図版Ⅲ)殆どが右向の行進をしており、逆方向、即ち左を向

いているのは前身頃に四羽見えるにすぎない(左前身頃——向って右——

に三羽、右前身頃——向って左——に一羽)。これら鶴の雛は単純な表現な

がら図様も刺繡技術も極めて生気に溢れた巧みさで、他の上文を凌いで

いる。この雛に多少類似の鶴の雛模様が前述挿図10の親鶴の下方に見ら

れる。

亀は蓬萊山模様に出てくる首が長い蓑亀で、室町・桃山・江戸前期の

模様の亀はこの種のもが多く、挿図10の向って左下端に見られる亀は

挿図9 伝太閤所用紗綾桐服 背面
桃山時代 京都 豊国神社蔵

挿図10 草花鶴亀等模様縫箔肩裾 部分
桃山時代 岐阜県・関市 春日神社蔵

この種の蓑亀を真上から見た図様である。胴服の裾に近い位置に正面に二匹（左前身頃——向って右——裾に一匹、右前身頃——向って左——脇縫寄りに鶴と相對して一匹）、背面に一匹（左後身頃の背割れ寄りに）配されている。大きさは尾の尖端までの長さが七センチ前後である。

地紋の山道は、室町・桃山時代の染織文様には屢々見られ、上杉家伝

挿図11 伝謙信所用(7)白地紗綾形雲文綸子・襟唐織胴服 襟部分 室町時代 米沢 上杉神社蔵

挿図12 萌黄地山道菊桐文片身替唐織 部分 桃山時代 防府 毛利報公会蔵

来の伝謙信所用「(7)白地紗綾形雲文綸子、襟唐織胴服」(挿図11)、毛利

報公会蔵「紅萌黄地山道菊桐文片身替り唐織」(挿図12)、東京国立博物

館蔵「紅白山道菊桐枝垂桜文様唐織」(挿図13)等に見られる山道文様

は、この胴服の地紋と同種である。この胴服の山道文様は金の摺箔、白

に近い薄紅の繡、橙色がかつた紅(サモンピンク)の繡の順で組合わさり

ジグザグ模様を構成している。それぞれの幅は、金摺箔の部分が最も狭

く一・六センチ、一・八センチ、二センチ幅と三種あり、薄紅部分は一

・八センチから二・二センチまでの幅、サモンピンクの部分が最も幅広

で二・四センチから二・五センチ幅となっている。

次にこれら文様の表現技術について述べると、地文に当る山道文様中

の金摺箔部分を除くとすべてが繡、即ち刺繡で表現されている。そして

この胴服に見られる刺繡の特徴は、刺繡糸も刺繡技術も室町・桃山期特

有の、中国明の影響の濃いものである。用いられている刺繡糸は芦の

穂、亀の尾に二色撚り合わせた太糸が用いてある以外は

すべて撚りのない絹の平糸である。刺繡の技法は、大部

分が裏面には糸が廻らない渡し繡^{註7}で、大きく糸が渡って

いる部分には抑えの線繡^{註8}が、葉脈とか輪郭などのような

線描的個所を利用して巧みに入っている。芦の穂や桐の

花房の茎、鶴の脚などは、いわゆる纏繡^{註9}で繡われてお

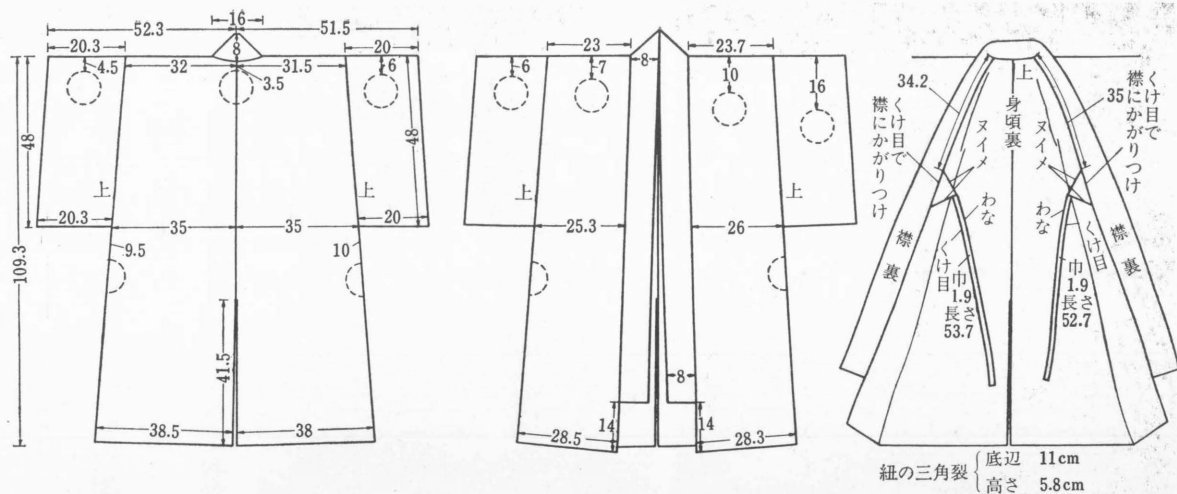
り、針目の半分から三分の一ぐらいを返えして進行する

返えし繡である。表裂全面に紙の裏打がしてあることは

前に述べたが刺繡のために表裂にひきつりを生じない工

作である裏打が施されている点も桃山刺繡の多くの作例

挿図13 紅白山道菊桐枝垂桜文様唐織 部分 桃山時代 東京国立博物館蔵



挿図14 吉川家伝来 山道草花鶴亀文繡箔胴服 実測図

と同様である。

刺繡糸は紅、白に近い薄紅、橙色がかつた黄紅(サモンピンク)、萌黄、鴉色、浅葱、薄浅葱、紫、金茶、白の擦のない絹の平糸の十色と、二色を撚り合わせた柰糸は、芦の穂に用いられている紫と白の絹の柰糸、亀の尾に用いられている金茶と萌黄の絹の柰糸の二種で、計十二色が使用されている。

色糸の使いわけは、上杉家伝来の伝謙信所用胴服八領の中、刺繡の多い「(2)紅地雪持柳繡、襟辻ケ花染胴服」「(3)白地桐文綾、襟繡胴服」「(4)白地五重襷牡丹唐草文綾、襟繡胴服」「(5)浅葱綾竹雀紋繡、襟摺箔描絵胴

服」(以上美術研究二四二、二四三号の拙稿参照)など室町・桃山期の刺繡遺品同様、葉や茎は萌黄や鴉色の緑系、花は基調にその花の色、雪は白といったように総じて実物の物に即した、或はそれに近い色の濃淡を効果的に繊細に使い分けながら、処々に写実からは離れた色が或時はアクセントの役を、或時は柔か味を添える役目を果たすように配してあり、また葉や花をきっぱりと途中で色を変えたり室町・桃山期の特徴がよくあらわれている。

刺繡技術は丁寧で優れており、個々の模様がくっきりと鮮やかに表現されている。大きく渡った渡し繡の繡糸も、よく目がつんで揃っている。ただ、鶴の雛を除く全図様に生彩さを欠く難が感じられるのはまことに残念である。

山道文様の摺箔部分は刺繡が完了した後で行われたことが明らかである。それは摺箔部分に入っている鶴の雛の脚などに金箔がわずかではあるが刺繡糸の上から附着していることから明らかである。

また摺箔の剥落部分の処々に刺繡の下絵の墨の線(図版Ⅲa参照)が見られ、これは室町・桃山期の他の繡や繡箔の例(挿図10参照)と同様である。

以上、紅の濃淡と金摺箔の華やかな山道地に、雪持芦、雪持笹、松、桐紋、鶴、鶴の雛、蓑亀を配したこの胴服の模様を詳述したが、この模様は、希望と生気に満ちた早春の景に、これから千年を生きようとする三六羽の鶴の雛まで交じえた吉祥模様を配したもので、将来の発展、子孫の繁栄を願った、いわば戦国武将の悲願を盛った模様といえることが出来るであろう。

(形状、法量、仕立て方)

形状、法量は一覧表と挿図14の実測図に示した。袷仕立てで、裏は通し裏、袖口には両袖とも約〇・一センチの襷があり、裾には襷はなく表裏が突き合わせになっている。背縫の折被せは表裏ともわれわれがいう正常な方向(美術研究二二八号、二〇頁、挿図3参照)になっている。

縫いは、伝上杉謙信所用の浅葱袖小袖(美術研究二二八号、小袖10参照)や同じく伝上杉謙信所用の(5)浅葱綾竹雀紋繻、襟摺箔描絵袷(美術研究二四三号、胸服(5)参照)、伝直江兼統所用薄浅葱緞子袷(美術研究二四四号、三八頁、挿図25、同四一頁、註51参照)の袷仕立とほぼ同様である。即ち袖下と背縫、両脇縫は四つ縫がしてあり、袖附、襟附は三枚一緒に縫ってから一枚がくけつけてある。具体的にいうと、袖附は、表袖と表身頃と裏身頃の三枚が一緒に縫ってあり、その後で裏袖がくけつけてある。襟附は、予め表襟と裏襟が縫い合わせてある襟裂の表襟の襟附と表身頃、裏身頃の三枚が一緒に縫われ、その後で、裏襟の襟附部分がくけつけてある。その襟附には肩山から右身頃の方は三四・二センチ下った位置に、左身頃の方は三五センチ下った位置に底辺一一センチ、高さ五・八センチの二枚くけ合わせの袷の三角裂がかがりつけてあり、三角裂には一・九センチ幅、長さは右が五三・七センチ、左が五二・七センチの袷の胸紐が挟み込んである。紐は両方ともわなが上、縫目が下につけてある(挿図14)。

縫糸は白S燃の絹糸で、縫目は四つ縫や三つ縫の平縫は〇・七〜一センチの針目で、二枚合わせの平縫は〇・四〜〇・五センチの針目になっている。くけ目は、裏袖のくけつけが一・五〜一・七センチの針目、裏襟のくけつけが〇・六〜〇・九センチの針目、胸紐のくけ目は〇・七〜〇・九センチ、三角裂のかがりつけは〇・四〜〇・六センチである。

(表裂)

白の練緯で、経糸は細く、緯糸の約 $1\frac{1}{2}$ の太さで、二本ずつ寄っており、密度は一センチ間に経糸は四本前後、緯糸は三二越前後である。

(裏裂、紐裂)

紅の練緯で先染、経糸は薄黄、緯糸は紅である。経糸は細く、緯糸の約 $1\frac{1}{4}$ の太さで、二本ずつ寄っており、密度は一センチ間に、経糸は四本前後、緯糸は三〇越前後の部分から三六越前後の部分と打ち込みが多少不揃いである。

(三角裂)

胸紐がついている部分の三角裂は一見裏裂や紐裂と共の紅練緯のようであるが、後染であること、経糸の二本ずつ寄っている寄り具合がゆるいことなど異質な点があげられる。経糸は細く、緯糸の約 $1\frac{1}{4}$ の太さで、二本ずつ寄っており、密度は一センチ間に、経糸は四本前後、緯糸は三八越から四〇越前後である。

三

以上の調査によって、吉川家伝来「山道草花鶴亀文繻箔胸服」には、次の諸事項が結論として述べられる。

この胸服は疑う余地のない「うぶ」な胸服で、この種の繻箔としては極めて保存状態がよく今日に伝えられている。

形態の上では桃山時代の胸服に共通する特徴をよく備えており、胸服としての形が、初期小袖の上にかさねて着たものであることを明らかに

挿図15 伝謙信所用(4)白地五重襷牡丹唐草文綾・襟繡胸服
室町時代 米沢 上杉神社蔵

示している。即ち一覧表、並びに実測図(挿図14)に示したように、桃山期以前の小袖の特徴で第一にあげられる狭い袖幅(a)、広い身幅(後身幅はb、前身幅はh)が先ず注目され、次の襟肩あき(c)が狭く、立衿(e、襟下)が短く、衿(i)が短いことが初期小袖の上にかさねて着た衣服であることを明らかにしている。

また、この胸服の袖は比較的年代の上る胸服に多い広袖(平袖)で、桃山期の胸服でも多少年代の下るものや後世の羽織には襷、乃至は襷に相当する大きさの裂の持出し分があるが、この胸服には上杉家伝来の謙信所用と伝えられる八領の胸服同様に襷がない。衿はないが、襟は裾までついておらずに立衿(襟下)があり、こういう形は上杉家伝来の八領の胸服の中で二領だけ衿のない胸服があつて(1)金銀襷緞子等縫合胸服、(4)白地五重襷牡丹唐草文綾、襟繡胸服の二領、美術研究二一六号、二四三号参照)

挿図16 石川家伝来 太閤拝領紙衣胸服
静岡・宇都谷 石川俊一氏蔵

その二領も襟は裾までつかずに立衿がある。桃山期でも時代が下る胸服や後世の羽織には背割れや裾脇あけのあるものは稀であるが、この胸服には背割れがある(上杉家伝来の八領の胸服には背割れのあるもの六領、裾脇あけのあるもの二領)。胸紐は三角裂を紐附部分に用いた大きく派手なくけ紐

で、時代的に上ると思われる胸服に多い形式である。

これらを総合した形態から、これに近いと思われる形態の胸服は、上杉家伝来の胸服八領中の(4)白地五重襷牡丹唐草文綾、襟繡胸服(一覧表の5、挿図15)と静岡市宇都谷^{うつご}の石川家に太閤より拝領したとして伝えられる紙衣胸服(一覧表、挿図16)の二領で、特に後者は吉川家の胸服同様に秀吉が小田原征伐に向つた際、宇都谷峠で馬の草鞋が切れた時、石川家の祖先が二足の草鞋を差し出して「一足は勝ってお帰りの折りに」と言つたか、その言葉に気をよくした秀吉が、胸服を脱いで与えたのがこれであるといわれる。それ以後、石川家には「お羽織屋」という名がついて、上り下りの大名がここでお羽織拝見に立ち寄り、家運が栄えたということである)、吉川家の胸服が天正一五年、石川家のが天正一八年と年代もほぼ同じで、胸

服形態上からの考察と、吉川家、石川家の家伝とが一致することになる。仕立ても亦、室町・桃山期の仕立上の特徴である鷹揚さや技術の幼稚さが窺われ、袷仕立の方法においても上杉家伝来の袷仕立の小袖や胴服に共通性が認められる。

更に表裂、裏裂等の裂地の種類と、それらの染、繡、摺箔の技術、文様はすべて前項で述べたように桃山期の特徴が顕著である。

従って吉川家伝来繡箔胴服は、家伝通り吉川広家が朝鮮征伐の功績によって天正十五年に豊臣秀吉より拝領したものと考えてよいであろう。

ここに伝来が確實で保存状態が極めて良好な桃山期の秀作を認め得たことは、わが染織史上、ひいては日本工芸史上、大なる意義があったといわねばならない。

この得難い資料を、良好な保存条件下に大切に今日に伝えられた吉川家の御先祖並びに御当主に対し、われわれは改めて深謝する次第である。

(一九七二年九月)

なお本稿の調査に当り、御多用中にもかかわらず種々御便宜をおはかり下さった文化庁美術工芸課の鈴木友也、橋本健一郎両氏並びに、御意見を賜った共立女子大学教授 授山辺知行、元当研究所美術部長中川千咲両氏に厚く御礼申し上げます。

註1 拙稿「染織品の保存と陳列」ミュージアム一四二号(昭和三八年一月号)十二頁中段以下段参照。

2 繡箔は摺箔(註3)に刺繡を加えたものをいい、能装束の縫箔は繡箔技術で出来ている能装束をいう。

3 摺箔は型紙で糊を置いた上に金・銀の箔を置いて模様部分を金箔や銀箔で表現したものを用い、能装束の摺箔は摺箔の技術で模様が表現されている女役の着付をいう。

4 地裂は刺繡、摺箔、描絵等で模様がつけられている染織品の地になっている裂(生地)をいう。

吉川家伝来「山道草花鶴亀文繡箔胴服」について

5 練緯は練貫とも書き、経糸に精練しない生糸を用い、緯糸(横糸)に精練した練糸を用いて平組織に織った絹織物で、経糸は緯糸にくらべて目立って細く、また緯に比して経の糸数が多い。表面に独得の光沢があり、薄手で張りのある生地である。室町・桃山時代の平絹にはこの練緯が多い。

6 裏打は元来補強の意味で行われる場合が多いが、室町・桃山時代の刺繡に見られる裏打は補強というより、比較的薄地の裂に刺繡を施すため引きつりが生じやすいので、その引きつり防止のため、予め刺繡の地裂に紙の裏打をし、刺繡糸は裏打の紙も同時に刺して行うといった方法がとられているようである。

7 渡し繡というのは、いわゆる「裏ぬき」の技法で、裂の裏に糸をまわさず、裂の表だけに糸を渡し、裂をわずかすくうだけで戻る、その方法のくり返えしで行われる繡法である。山本らく著「刺繡」(日本染織芸術叢書5、昭和四十七年三月芸艸堂発行)の繡法の種類では2平繡、3斜繡に属するようである。2平繡は「糸を平に並べて、形の面をぬい埋める方法」、3斜繡は「比較的細長い形をぬう方法」と解説にある。

8 山本らく著「刺繡」(註7参照)の繡法の種類では、6一針掛繡、7乗掛繡に入ると思われる。6一針掛繡は「細い線を表わすぬい方で、針目の長短に関係なく、一針で糸を渡すぬい方である。長い針目の場合には直線、曲線、いずれも細い糸でこまかくとめる。これは葉筋、または松葉などに応用される」、7乗掛繡は「一度ぬいた上から更に乗せかけてぬう方法、平繡などで針目の長い場合その針目を押さえるため、または色の変化をつけるときなどに用いる」と解説にある。

9 山本らく著「刺繡」(註7参照)の繡法の種類では、1纏繡、57継針繡などに入ると思われる。1纏繡は「細い線をぬうときに用いる方法で、線の太さに応じて二針立、三針立、四針立の別がある。二針立は仮りに針目を○・六センチとした場合、図のように1から出して○・三センチの針目で2に入れ、次に3に出して○・六センチの針目で4に入れ、5に出して6に入れる。常に針目の二分の一進み、二分の一返えして二本の糸を並べて行くぬい方である。三針立は針目の三分の一進み、三分の二返えして、常に三本の糸を並べ、また四針立は針目の四分の一進み、四分の三返えし、常に四本を並べるぬい方である」、57継針繡は「一定の針目の長さをつないで一本の糸のようにするぬい方である。それには図のように返えし針、送り針、及び両面繡の方法がある」と解説にある。